

トマス・アクィナスにおける思考力 (vis cogitativa)

——表象像の準備におけるその役割——

周 藤 多 紀

I

1. トマス・アクィナスは、その内部感覚論において、人間のもつ内部感覚の一つとして、「思考力 (vis cogitativa)¹⁾」を措定している。トマスの著作のうちに「思考力」に関するまとまった詳細な記述がないため、この思考力の存在と働きは、長い間ほとんど省みられることなく放置されてきた²⁾。しかしながら、1940年前後から、思考力は著名な研究者達の注目するところとなってきた³⁾。思考力は人間の認識と実践の両面で重要な役割を担っており、その存在と働きのうちには、トマスの思想の独自性がすぐれて見てとられるからである。ここで私がトマスの思想の独自性というのは「存在 (esse)」の伝達という仕方での魂と身体の結合、知性的なレベルでの活動（認識・欲求）と感覚的なレベルでのそれとの連続性である。本論は、抽象作用の前提条件となる「表象像の準備」の場面での、思考力の働きを明らかにする作業を通して、上記のトマスの魂論、認識論の特色を浮かびあがらせることを試みたい。

2. 「思考力」の概念の発生と形成には、トマス以前のギリシャ、ユダヤ、アラビア、キリスト教哲学における長い歴史がある。トマスの魂論・認識論の独創性を正確に理解するためには、トマスが多くを学んだアリストテレス、あるいはアヴィセンナやアヴェロエスの魂論、認識論⁴⁾との比較研究も必要とされよう。しかしながら本論は、その概念史研究⁵⁾や比較研究には深入りせず、まずトマスのテキストを詳細に検討することによって⁶⁾、トマスの思考力の働きとその哲学的含意を明らかにすることを意図したい。

II

1. この「思考力」を含めた内部感覚に関する基本テキストであり、内部感覚に関す

る唯一のまとまった記述となるのは、『神学大全』第一部第七十八問第四項であり、その問題は「内部感覚は適切に区別されているか」である。トマスはこの主文で動物に必要な感覚の働きを検討し、「固有感覚 (sensus proprius)」の他に「共通感覚 (sensus communis)」、 「表象力 (phantasia sive imaginatio)」、 「記憶力 (vis memorativa)」、 「評定力 (vis aestimativa)」の四つの内部感覚を提示している。まず、本論の主題の理解に必要な限りで、ごく簡単にそれら各々の能力の基本的機能を確認しておこう。

我々が白砂糖を見るとき、視覚がその白さを捉え、我々がその砂糖を味わうとき、味覚がその甘さを捉える。その後、視覚によって捉えられた白さという情報（トマスの言葉で言えば「可感的形相」）と味覚によって捉えられた甘さという情報を総合して「白くて甘いもの」という情報を捉えるのが共通感覚である。そして、この共通感覚に集められた情報を保存するのが表象力である。さらに、外部感覚や共通感覚では捉えられないが、感覚によって捉えられる「有益さ」あるいは「有害さ」といった情報をトマスは「個物のインテンチオ (intentio)」, ないしは「個的なインテンチオ」と呼んでおり、そのインテンチオを把握するのが評定力である。そして、そのインテンチオを保存するのが記憶力である⁷⁾。

2. 思考力は、この『神学大全』の箇所では、評定力の延長上に位置づけられている。トマスは、上述のような諸内部感覚の機能を一通り列挙した後に、個物のインテンチオの把握と保存の様態（つまり評定力と記憶力の働きの様態）に関しては、人間と他の諸動物の間で、顕著な差異が認められることを指摘する。他の諸動物が、有用ないしは有害であるかということに即して、本能的に個物のインテンチオを把握するのにとどまるのに対し、人間はさらに、比量を用いて個物のインテンチオを把握することも可能である。このような特別な働きのために、人間のもつこの能力は「評定力」とは呼ばれず、「思考力 (vis cogitativa)」ないしは「個別的理性 (ratio particularis)」と呼ばれる⁸⁾とトマスは述べる。

3. さらに、この後の自由意志論の箇所では、

「羊は、オオカミを見て、それが回避すべきものであるということ、自由な判断ではなく、本能的な判断によって判断する。なぜなら、〔羊は〕比量によってではなく、自然的な本能によって、このことを判断するからである。そして、同様のことは、非理性的な動物のあらゆる判断について言える。それに対して、人

間は判断によって行動する。すなわち、人間は、認識能力によって、あるものが回避すべきものであるか、あるいは追求すべきものであるかを判断する。しかしながら、〔人間の場合〕こうした判断は、個々のなされることならについての自然的な本能に基づいてではなく、理性のある種の比量に基づいて行われる。 (S. T. I, 83, 1, c.)」

と述べられている。内部感覚論での記述を重ね合わせると、この「認識能力 (vis cognoscitiva)」は、明らかに思考力をさす。これ以外の箇所を合わせても、『神学大全』での思考力の働きに関する具体的な記述は、評定力ないしは他の動物の本能と比較した場合の、人間の実践的認識の側面にはほぼ限られていると言える。

4. ところが、トマスは『対異教徒大全』第二卷第七十三章においては、思考力が、能動知性による抽象作用の前提となる「表象像の準備 (praeparatio)」を担うと明記している。

「思考力は、それによって人間が認識する可能知性への秩序をもつのだが、それは、表象像を準備する思考力の働きによってである。その結果、表象像は、能動知性によって、現実⁹に可知的なものとなり、可能知性を完成するものとなる。 (S. C. G. 2, C. 73, n 1503.)」

しかしその箇所では、この表象像の準備がどのようなものであり、どのような仕方¹⁰で生じるかについては、それ以上言及されていないため、解釈の余地を残すものとなっている。

5. ある解釈者 (十五世紀のトミスト、フェラリエンス) は、思考力は表象像の準備において特別な働きを担うのではないと考えている。フェラリエンスの『対異教徒大全注解』⁹⁾での解釈を要約するなら、思考力が表象像の準備をするという表現は、「表象力や思考力の身体器官がより完全に態勢づけられていればいるほど、それらの能力の身体器官に受けとられる表象像がより可知的になりやすい」ことを含意していると見なされるのである。

6. じっさい、トマスは幼児の知性認識の働きが、判明なものではないのは、表象力の働きが混雑しているためとしており、さらにそのような表象力の働きの混雑の原因を脳の過度な湿りに帰している¹⁰⁾。思考力による表象像の準備を思考力の身体器官の状態と関連づけるフェラリエンスの解釈は、知性認識の働きには内部感覚器官 (すなわち脳) の適切な状態が不可欠であるとするトマスのテキストに沿ったもので

ある。また、そのような解釈は、実践的認識の側面に限られる『神学大全』の思考力の記述とも整合性をもつのは確かである。

7. しかしその場合、準備されるのは、第一義的には思考力の身体器官であって、表象像ではない。しかも、その準備される表象像のあり方を決定するのは、究極的には身体器官の状態であって、思考力の働きそのものではない。つまり彼の解釈は、トマスの言葉「思考力の働きによって表象像を準備する」を文字通りに理解するには、十分ではない。そして、このような解釈は、思考力が魂の諸能力中で占める特殊な位置とその位置のもつ重要性を見逃した帰結であると考えられる。

III

1. トマスは、諸感覚と知性のうちで、思考力を次のように位置づけている。

(1)「思考力と哲学者たちによって呼ばれている能力は、感覚的部分と知性的部分の境界にあり、そこでは感覚的部分が知性的部分に触れている。 (In 3 Sent., d. 23, q. 2, a. 2, ad3.)」

(2)「思考力は、感覚的な部分の中で最上位のものであるから、思考力は、ある仕方で知性的部分に触れており、その結果、知性的部分の最下位にあるもの、すなわち理性の推論を分有する。 (De Veritate, q. 14, a. 1, ad9.)」

(3)「この力 (=思考力) は感覚的な部分のうちにある。というのは、人間の場合、感覚的能力は、その頂点で知性的能力のあるものを分有し、感覚は知性に結合されるからである。 (In 2 de Anima, C.13, 121-2, ll. 191-211.)」

(4)「魂のこの部分 (=思考力) は知性と呼ばれる。それは、理性に従いその動きに後続することで理性を分有する限りにおいて、この部分が理性的と呼ばれるのと同様である。 (In 3 de Anima, C. 4, 223, ll. 239-242.)」

2. これらのテキストから、次のことが確認される。思考力は諸感覚のうちで最上位にある。そして、その特殊な位置のために、知性がはたらいっているとき、その働きによって動かされ、導かれる—トマスの言葉に従えば「知性を分有する」—という本性をもつ。

IV

1. このような思考力の位置とその本性は、問題としている「思考力による表象像の

準備」の理解に深く関わってくる。

まず、基本テキストである『神学大全』の第七十八問第四項における思考力の記述を再確認しよう。その第五異論解答では、次のように述べられている。

「人間のもつ思考力と記憶力は、感覚的部分に固有なものによって、そのような卓越性をもつのではない。そうではなくて、普遍的な理性への何らかの近親性 (affinitas) と接近 (propinquitat) によって、ある種の湧出 (refluentia) に即してである。したがって、思考力と記憶力は、他の動物のもつものと異なる能力ではなく、同じ能力であり、ただより完全なものなのである。」

このテキストから読みとられるのは、次のことである。思考力が他の諸動物のもつ評定力と比較して卓越した働きをもつのは、それが評定力と異なる能力であるためではない。それは、思考力は知性に近い位置にあり、知性の力が十分に発揮されている際には、知性に思考力の働きの影響が及んでいくためである。したがって、まだ知性の力が十分に発揮されていない幼児では、思考力は、他の動物の評定力と同程度の働きしかなきないと考えられる。じっさい、トマスは、誰にも何も教えられていないのに、人間の幼児が乳房を求める行動のうちに、動物の本能、つまり評定力と同じ機能を見いだしている¹¹⁾。

2. ところで、感覚能力が、知性と関係することによって、より卓越した働きをなすということを、トマスは、能動知性の照明に関する場面でも言及している。

「表象像が照明されるというのは、感覚的部分が知的部分との結合 (coniunctio) によって、より強力にされるにつれて、能動知性の力によって、表象像が、そこから可知的なインテンチオ (intentio) が切り離されるのに相応しい状態にされることである。(S. T. I, 85, 1, ad4.)」

照明は抽象の前段階とされているから、思考力が、抽象の前段階としての表象像の準備をすれば、そのとき、感覚的部分である思考力は、知性と結びつくことによって力を強めていると考えられる。

3. さらに、能動知性の照明とは、能動知性が表象像へ向くことに他ならないと考えられる¹²⁾のであるが、「向くこと (conversio)」に関しては、天使同士の照明の場面で、次のように説明されている。

「より不完全な物体は、より完全な物体の場所的接近によって強められる。例えば、より熱くないものは、より熱いものの現存によって熱を増す。それと同様に、

より下位の天使の知性的能力は、より上位の天使がその下位の天使の知性に向くことによって、強化される。なぜなら、物体において、場所的接近の秩序が生じさせることは、靈的事物において《conversio》の秩序が生じさせるからである。(S. T. I, 106, 1, c.)」

人間の魂の諸能力は、それらが魂の本質から発する限りにおいて、靈的事物の秩序に属する。したがって、天使の序列の場合と同様、より上位の能力たる知性の、より下位の能力たる思考力への《conversio》によって、より下位の能力たる思考力は強化されると考えられる。これが、抽象の前段階としての「能動知性の表象像への《conversio》」の際に生じていることであり、(同じく抽象の前段階である)思考力による表象像の準備の際には、能動知性が思考力へ向くことによって、思考力がより強力な働きをすると考えられる。

4. これらのテキストをつなぎあわせると次のように言えよう。《refluentia》《coniunctio》《conversio》という異なる諸表現の下で、思考力と知性の間に生じている事態は同一である。それは、思考力の力が知性の動きの影響下で強化された結果、思考力が評定力を大きく上回る、思考力に固有の働きをするようになることである。そして、このように強化された状態での、思考力に固有の働きとは、先(II-2)の『神学大全』の記述(S. T. I, 78, 4, c.)にしたがうのであれば、「比量を用いて個物のインテンチオを発見すること」である。

V

1. ところで、比量を用いて個物のインテンチオを発見することが、なぜ能動知性の抽象作用の前段階としての表象像の準備であるのかという点の理解に関しては、トマスのアリストテレス注解での記述が有効であるように思われる。

トマスは、アリストテレスが『分析論後書』第二巻 100a17sq. で、「個物は感覚されるものであるが、感覚は普遍に関わる。すなわち、感覚は人間に関わるのであって、人間であるカリアスに関わるのではない。」と述べている箇所を注解して、次のように述べている。

「個物が本来的にかつ自体的に感覚されるのは明らかであるが、感覚は、ある仕方、普遍にも関わる。というのは、感覚は、カリアスを、ただカリアスである限りにおいてではなく、この人間である限りにおいても認識する。同様に、〔感

覚は] ソクラテスをこの人間である限りにおいて認識する。そして、感覚のこのような把握が先在することによって、知性的魂は、ソクラテスとカリアスという両者のうちに、人間を考察することができる。もし感覚が、ただ個性に属するもののみを把握し、このような個性に属するものと共に個物のうちにある普遍的本性 (*natura universalis*) を把握しているのでなければ、我々において、感覚の把握から、普遍的認識が生じることは不可能であるだろう。(In 2 *Analy. Post.*, l. 20, n.14.)」

2. そして、ここでの「感覚」とは、外部感覚、すなわち五感の総称ではなく、本論で問題としている思考力であることが、『デ・アニマ注解』の次のような記述からも読みとられると思う。

「思考力は、個物を、共通本性 (*natura communis*) の下に存在しているものとして把握する。このことは、思考力が知性的能力と同じ基体において結合されている限りにおいて生じる。ゆえに、思考力はこの人間をこの人間として、この木をこの木として認識する。(In 2 *de Anima*, C. 13, 122, ll.206-11.)」

つまり、「普遍的本性」と「共通本性」という言葉の相違はあるが、『分析論後書注解』においても、『デ・アニマ注解』においても、トマスは、思考力に、ソクラテスやカリアスといった相異なる個物のインテンチオを把握する機能のみならず、人間—この時点では、個的な条件から完全に切り離されていない限りにおいて、普遍的¹³⁾概念である「人間」とは区別される——という個体間に共通する個的なインテンチオ—を把握する機能を帰属せしめていることは明らかである。そして、『分析論後書注解』によると、このような思考力の機能は、普遍的概念の抽象に不可欠である。

3. したがって、能動知性による抽象作用の前提となる思考力の「表象像の準備」とは、思考力自体によって把握された個物の個性を含む複数のインテンチオを比量することで、個物間の共通要素を抽出することであるといえよう¹⁴⁾。そして、このような比量が行われている際、可感的形相を保存する表象力、個物のインテンチオを保存する記憶力が、思考力の命令の下に、共にはたらいっていると考えられる¹⁵⁾。

VI

1. 以上の考察によって、表象像の準備における思考力の役割が明確にされたと思う。思考力は、実践的認識の場面のみならず、思弁的認識の場面でも、思考力に固有な比

量という働きによって、重要な役割を果たしているのである¹⁶⁾。表象像の形成に関わる能力としては、その名称から表象力が代表的なものとされ、他の内部感覚の働きは見過ごされがちである。しかし知性認識の場面での、より限定して述べるなら能動知性の抽象作用の前提となる表象像の準備の場面での、思考力の働きの特殊性に注意が払われるべきである。

2. 思考力は、知性の働きなしに、その固有の働きたる個物のインテンチオの比量をなすことができない。他方知性もまた、感覚能力たる思考力なしに、その固有の働きたる普遍的概念の抽象をなすことができない。トマスは、『真理論』第十問第六項で、人間の知性認識は、離在知性から人間の知性へ形象が流入することによって成立するとするアヴィセンナの認識論を批判し、次のように述べている。

「そのような見解は、理にかなったもののように思われぬ。なぜなら、そのような見解に従えば、人間の知性認識と感覚能力相互の必然的な依存が存在しないことになるから。(De Veritate, q. 10, a. 6, c.)」

アヴィセンナも、知性認識成立の過程での、思考力による何らかの「準備」の必要性を主張しているとトマスは認める。しかしアヴィセンナの説では、思考力によって態勢づけられるのは可能知性であって表象像ではないとして、トマスはこれをしりぞけるのである¹⁷⁾。

3. さらに、このような思考力の働きが、トマスの魂論・人間論にその基礎をもつことは心に留められるべきであろう。じっさい、身体をもつ人間の魂が、質料の実体と分離実体の境界上に位置づけられている¹⁸⁾のに対応するように、思考力は感覚的部分と知性的部分の境界上に位置づけられている¹⁹⁾。

4. 本論は、人間の思弁的認識の一側面、表象像の形成という働きに限定して思考力の働きを検討した。その範囲内でも、思考力は、アヴィセンナのプラトニズムを批判し、感覚認識と知性認識の間に明確な差異をもうけながら同時にその密接な結びつきと連続性を強調する、トマスの認識論の特色を端的に映し出すものとなっている。そのような認識論の特色は、魂と身体の分離可能性とその密接な結合を主張するトマスの魂論、人間論の特色を反映するものである²⁰⁾。実践的認識の側面における思考力の働きにも同様の特色が反映されていると予測される。しかし、それがとりわけ知慮 (prudentia) の徳の形成において見てとられることを指摘するにとどめ²¹⁾、今後の課題としたい。

注

- 1) 本論で論じられるような働きからすれば、《vis cogitativa》について、従来の「思考力」ないしは「思考能力」との訳は、必ずしも適切ではない。日本語の「思考」という言葉は、複数のものを比較考量するというより、一つのことがらを熟考するというニュアンスをもつからである。しかしこれらの訳は既に定着しており、混乱を避けるため、本論では「思考力」という訳語を採用した。
- 2) C. Bérubé, *La Connaissance de l'individuel au Moyen Age* (Montréal: Montréal UP, Paris: PUF, 1964) 61 の指摘に従う。J. Peghaire, "A Forgotten Sense: The Cogitative, According to St. Thomas Aquinas," *The Modern Schoolman* 20 (1943): 123-40, 210-29 の表題もその事実を物語る。
- 3) 年代順に、C. Fabro, "Knowledge and Perception in Aristotelic-Thomistic Psychology," *The Modern Schoolman* 12 (1938): 337-65, Peghaire op. cit., G. Klubertanz, *The Discursive Power*, Missouri: The Modern Schoolman, 1952, Bérubé op. cit. 60-1, G. Verbeke, "A Crisis on Individual Consciousness: Aquinas's View," *The Modern Schoolman* 69 (1992): 393 などである。最も包括的な研究は、Angelo da Castronovo, "La Cogitativa in S. Tommaso," *Doctor Communis* 12 (1959): 99-244 に見られる。
- 4) それぞれ、F. Rahman, *Avicenna's Psychology* (Westport: Hyperion Press, 1952), A. de Libera trs. and comment., *Averroès l'intelligence et la pensée sur le De Anima - Grand Commentaire du DE ANIMA 3-* (Paris: GF Flammarion, 1998) がその理解に有益であろう。
- 5) 既に Klubertanz op. cit. により、かなり詳細になされている。
- 6) 思考力に関する記述のほとんどは断片的であり、その数も限られているために、本論は、初期著作から後期著作まで、思考力に関する記述をほとんど無差別に扱っている。各著作間で思考力に関するトマスの学説に大幅な変更があれば、このようにテキストをつなぎ合わせて思考力の働きを解明することは許されない。しかし後註 16 で述べるように、思考力の働きに関するトマスの基本的理解は、前期著作から一貫していると考えられる。
- 7) 以上の記述は、S. T. I, 78, 4, c. に従う。
- 8) *ibid.* 思考力に関するトマスの用語法には、注意しなければならない。トマスは、個別的理性と受動知性を、思考力の別称として認めている。しかしこの受動知性がさすものについては、著作間で変化が見られる。前、中期著作では、思考力=個別的理性=受動知性である (*In 4 Sent.*, d 50, a. 1, ad3, S. C. G. 2, C. 73, n 1501, *Q. de Anima*, a. 13, c.) のに対し、後期著作 (S. T. 1-2, 51, 3, c., *In 1 Peri Hermeneias*, 1. 2, 11, 119-22, *In 7 Met.*, l. 10, n. 1494) では、思考力以外に記憶力と表象力を含む

広義での表象力とされている（著作年代は Torell の研究による）。したがって、正確に言えば、トマスの一貫した理解として、思考力＝個別的理性＝受動知性という図式は誤りと言わなければならない。前期の受動知性理解はアヴェロエス『デ・アニマ大注解』の、後期における受動知性理解の変化はアンモニウス『命題論注解』の受動知性解釈の影響が認められる。（Cf. Averroes, *In 3 de Anima*, 476, 76-7, Ammonius, *In Perihermeneias*, 10, 51-2.）しかし、後期著作でも、『ニココス倫理学注解』（*In 6 Ethic.*, l. 9, 369, ll. 182-6）は前期の受動知性理解に戻っているように必ずしも一様ではない。

- 9) *Ferrariensis, Comment. in S. C. G. 2, C. 73*, 466.
- 10) *In 2 Sent.*, d. 20, q. 20, a. 2, ad4.
- 11) *In 2 Sent.*, d. 20, q. 20, a. 2, ad5.
- 12) cf. *virtute intellectus agentis resultat quaedam similitudo in intellectu possibili ex conversione intellectus agentis supra phantasmata...* *S. T. I*, 85, 1, ad3.
- 13) アリストテレス解釈、トマスの普遍の哲学的含意の解明という観点からは、この「普遍」の存在論的なステイタスに関する、より厳密な規定が必要とされよう。稲垣良典「普遍の問題」『トマス・アクィナス哲学の研究』（東京：創文社、1977）174-98。G. E. L. Owen. "Particular and General," *Logic, Science and Dialectic* (Itaca: Cornell UP, 1986) 所収, 279-94. (初出は1978.) 木曾好能「個物と普遍」新岩波講座哲学4『世界と意味』（東京：岩波書店、1985）194-225はそれぞれ異なる角度からこのことを示唆する。最近では、例えば Gracia は、暫定的ではあるが、それを "instantiability" と規定している。cf. J. J. E. Gracia, "Cutting the Gordian Knot of Ontology: Thomas's Solution to the Problem of Universals," *Thomas Aquinas and His Legacy*, ed. D. M. Gallagher, *Studies in Philosophy and the History of Philosophy* vol. 12 (Washington, D. C.: CUA Press, 1994) 18.
- 14) 本論の発表後、このような思考力働きはアウグスティヌスの記憶論、『告白』第十卷第十一章に登場する《cogito》の語源の解説（<cogere 集める）を反映しているのではないかと御指摘を、アウグスティヌス研究者の方々から頂いた。御指摘のように、トマスはこのアウグスティヌスの語源解説を意識していたようである。"Cogitare est considerare rem sec. partes et proprietates suas, unde dicitur quasi co-agitare. (*In 1 Sent.*, d. 3, q. 4, a. 5.)"
- 15) 自身の見解として述べていないが、*S. C. G. 2, C. 60, n. 1370* で、「表象力と記憶力とともに (cum), この能力〔思考力〕によって、表象像を現実に可知的なものにする能動知性の働きを受けとるように、表象像が準備される」とトマスは述べている。また、後期著作に見られる受動知性理解（次注参照）も、このような思考力の働き方を示している。
- 16) 『神学大全』に、思考力のこのような重要な役割が記されていない理由は、その

テキストの構成（感覚から知性への論述の進行）があると考えられる。『神学大全』が、初学者をその対象としており、注意深い問題の選択と構成《ordo disciplinae》を特色としていることはしばしば指摘される。eg. M.-D. Chenu, *Introduction à l'étude de Saint Thomas D'Aquin*. 5. ed. (Paris: J. Vrin, 1993) 256-65. 知性認識の具体的なあり方（抽象）に言及する前に、抽象作用の準備としての表象像の準備に言及することは、このようなテキストの意図に反するものであったと推測される。また、初期著作から思考力による表象像の準備が明記される中期著作『対異教徒大全』にかけて、思考力に関してトマスの学説に重大な変更があったのではないかと推測されるかもしれない。しかし、アリストテレス『デ・アニマ』第三巻第五章の 430a25 の「これなしには何も認識しない」との箇所を、トマスは初期著作から「受動知性（＝思考力）なしには、知性は何も認識しない」とトマスは解している。つまり、抽象作用をとともなう知性認識の成立において、思考力の介在が不可欠であることを、トマスは既に初期著作の時点で認めている。離在知性論との論争の中で、《refluentia》《coniunctio》《conversio》といった概念を用いながら、思考力に関する学説がより精密になった、あるいはアリストテレスの注解の作業及びそれと平行して行われたアリストテレスの古注の読解を通して、思考力に関わる用語法が変化したとは言える。しかし、思考力に関するトマスの基本理解には重大な変更はなかったと考えられる。同様の見解を表明しているものとして、F. X. Putallaz. *Le sens de la réflexion chez Thomas D'Aquin* (Paris: J. Vrin, 1991) 58. n. 69 がある。

17) S. C. G, 2, C. 76, n. 1568.

18) Q. de Anima, a. 1, c.

19) 本論IIIテキスト(1)

20) このようにトマスの認識論が、魂の存在のあり方に対する問いを基盤として成立していることを、知性に関しては、既に詳しく論じた。拙論「トマス・アクィナスにおける能動知性—その変化と一貫性—」『中世哲学研究』17 (1998) : 54-7. またこのような観点から、時代は隔たるが、心身分離の立場に近いスアレスが、比量や判断といった機能を思考力に帰属せしめるのを拒否しているのは興味深い。De Anima 3, C. 30, 705.

21) 知慮の主要な基体は思考力であるが (S. T. 2-2, q. 47., a. 3, ad3), 知慮の成立には、知性と思考力の双方の能力が不可欠とされる (S. T. 2-2, q. 49, a. 2, ad1).

[テキスト] トマスについては、『神学大全』『対異教徒大全』『形而上学注解』『分析論後書注解』は Marietti 版、『命題集注解』は Mandonnet-Moos 版、それ以外はレオニナ版による。フェラリエンスの『対異教徒大全注解』は、レオニナ版『対異教徒大全』に所収のものによっている。アヴェロエス、アンモニウス、スア

レスについては、それぞれ The Mediaeval Academy of America 刊の CCAA vol. 6-1. (ed. Crawford), Louvain UP. 刊の CLCAG vol. 2. (ed. Verbeke), Vivès 版によっている。

* 本論は、平成十年度文部省科学研究費補助金による成果の一部である。